生存の条件——伝承に見る異文化遭遇の儀式

——ニュージーランド，東ポリネシア系先住民マオリ人の例——

竹内　佑利子

1．序

ニュージーランドは，1990年に入植150年を迎える[1]。1840年2月6日に，先住民東ポリネシア系マオリ人と英女王との間にワイタンギ条約が結ばれ，マオリ人の首長50人は，アオテアロア（長い白い雲＝ニュージーランドのマオリ名[2]）の主権および土地の単独購入権を大英帝国女王に譲渡し，先住民は，土地，資源，漁場のほか，共同あるいは個人で保有している資産の所有権の保証および英国民としての権利を得た。

現在のニュージーランドの住民は，マオリ（先住民東ポリネシア系），パケハ（英国系入植者の子孫，および新しい欧州系移住者），アイランダー（南太平洋諸島からの新しい移住者），それにアジア他諸地域からの難民で構成されている。アイランダーと難民の移住者数は近年次第に増加し，ニュージーランドは，この150年間のアイデンティティーであった「二つの文化一つの国」から，多民族多文化国家の様相を呈するようになってきている。

ニュージーランドの総人口は現在約330万人であるが[3]，マオリ人はその約12パーセントをしめる。マオリ人口40万強という数は，18世紀後半のキャプテン・クックが推定した10万の4倍であり，歴史家キース・シンクレア教授の

推定数20万人の倍増となる[4]。この変化を豪州タスマニア島原住民の状況変化と比較してみたい。タスマニア島と，ニュージーランドの北，南両島は，ともに南半球のスイスといわれるほど，水量も緑も豊かで地味も肥えているうえ，豪大陸のような砂漠を含む広い荒地がない。入植者にとっては魅力的な土地，従って先住者の存在が邪魔になる，という共通点がある。タスマニア島では，開拓者が牧畜の土地を確保するために原住民を殺し，あるいは島外へ追放した。入植者が渡来する前は，約4000人から7000人のアボリジナルが島にいたと推定されている。1804年には最も少なくみつもっても3000人いたアボリジナルは，1830年には300人を数えるのみになった[5]。少数がフリンダーズ島に逃れたが，タスマニア島のタスマニア島人は，19世紀後半のトルガニニの死亡をもって一人もいなくなる[6]。ニュージーランドに移住してきたのは，本国の地主階級のように土地もちをめざし，自ら志願して赤道を越えてきた英国人が多い。彼らのよい土地への欲望は，タスマニア島の牧畜業者のそれと同程度に強烈であった。しかし結果として，先住者たちの生存に響く損害の程度は，数字にあらわれているように，タスマニア島とニュージーランドではひどく異なり，その影響は現在までもおよんでいる。

この違いは，何に起因しているのか。豪州とニュージーランドの入植者の出身の相違，入植時期のずれが，ニュージーランド開拓を少しばかり賢く運営するのに貢献したのかもしれない。(タスマニア島では，1828年には，人口約2万300人のうち，男囚約6700人，女囚700人強であった。[7]) これにマオリ人の客あしらいがうまかったことをつけ加えてもいいかもしれない。この点の傍証はいくらでもある。筆者もニュージーランド滞在中に，伝説化された数々のエピソードを聞いた。例えば，「マオリ人は客人を手厚くもてなす。ある部族は冬用の保存食料までありったけ出して客の大集団にご馳走し，あげく冬を越せずに部族の大方が餓死してしまった」という話[8]。また，「キャプテン・クックが，マオリのある首長からひすいのペンダントを贈られ，礼に釘を与えた。首長は祭壇のような場所を作り，その釘を死ぬまで飾っておいた。そ

の釘は，パケハ（白人）との友情の証として，部族の首長の地位につくものが受け継いだ[9]」話等々である。

しかし人のよさや人なつっこさだけでは，土地亡者の餌食にならずに済む保証としては弱い。むしろ逆ではないか。地元民が新参者に対してこわもての態度を示す。あるいは，石器時代の文化しか発達させていなかった「蛮人文化」ではあるが，「近代文化」に並ぶ洗練された様式が存在するのだと示すことが，生存のチャンスを高からしめるのではないだろうか。だいいち民族のロマンティック度を比べたら，アボリジナルのほうがよほど詩的なメンタリティーの持ち主である。白人が渡来したとき，アボリジナルは，彼らの帆船のイメージから，白い鳥の人々と呼んだ。マオリは，註1に書いたように，「マオリ＝この土地の」者は自分たち，「パケハ＝よその土地の」者は白人たち，というように，ネーミングにも明白な権利意識がはたらいている。

マオリ人の150年は，聖書と銃に出会ったり土地戦争を戦ったりで，波乱万丈だった。現在はごく今日的な問題，教育の困難や失業率，犯罪率の高さなどを抱えている。けれどもマオリ人は，国会にマオリ議席をもつ，つまり特別議席を確保されている被征服民族である[10]。また社会生活の中でも，例えばマオリ人サラリーマンは親の死亡に際して会社から3日間の休みが許されるのが慣例である（パケハは葬儀の当日1日のみ）というように，マオリ伝統の独自性は近代国家史の150年を経ても尊重されている。

このようにマオリ人にとって，人口減少とアイデンティティーの危機の加速は，相対的にゆるやかであった。その理由を英国植民史の視点に立って探るのも一つの道である。また，マオリ人のもつ何かが危機の進行をゆるやかに妨げる役割をはたしたのではないか，と考えてみるのも役立つかもしれない。その何かは，伝承の力ではないだろうか。しかし，アボリジナルも豊かな伝統を継承している，と反論されるかもしれない。それはその通りである。小文では，アボリジナルの伝承とポリネシアの伝承の比較は試みていないので簡単にしか書かないが，アボリジナルの伝承は，遊動生活の知識は別とし

て，死生観を含め内面を向いているのが魅力的であり特徴的である。しかし，異民族異文化との出会いを，自己変革の好機にしようとする伝承ではない。

150年前の異民族，異文化との出会いにおいて，ニュージーランド先住民のどのような伝統が，未知の来訪者に深い印象を与えたか，言い換えれば伝承は生存の条件を用意していたのか，いなかったのか，マオリタンガ（マオリの伝統精神）を象徴する儀式をとりあげて考えてみたい。

2. マオリの儀式

筆者は1979年から4回ニュージーランドを訪れた。英語圏児童文学の研究と翻訳に携わるようになったのがきっかけで，ポリネシアの口伝えの語り（おもに創世神話と子供，若者のための昔語り）を聞きたくなったためである。日本のいろりばたの昔話と違って，マオリの昔語りは大きな集まりの中で行われる。しかし，マオリの大きな集まりは多くの場合重要な儀式である。出席がすんなりと許されたわけではむろんない。当時，日本でも昔話の採話者のグループに入って，お年寄りの語り手を訪ねたりしていた筆者にとって，これは無知のせいではあるが驚きだった。日本ではどこへ行っても，「近頃は，孫たちもテレビのほうがおもしろいといって，年寄りの昔語りなど聞いてくれない」といわれ，喜んで語ってくれた。老人福祉の予算を，昔話採話費（交通宿泊費，テープ，電池代，編集出版費）に提供する山間の自治体も沢山ある。孫の代わりに昔話を「聞いてくれて」お年寄りを何日か楽しませ，かつ後に「某地方の民話」と題する立派な本を作る人々は，役場にとってみれば便利な存在なのである。このような奇妙な現象を筆者もあたりまえに受け取っていた。

ニュージーランドでは，「語りの場は神聖だから，あなたの関心を満足させるために同席させるわけにはいかない」と，マオリ人にはっきり拒絶されたこともあった。外交官と作家という二足のわらじをはいて活躍するウィテ

ィ・イヒマエラ氏には，「マオリ人以外に，マオリタンガ（マオリ精神）に共感をもてるなどと期待もしていない」といわれた。次の日，イヒマエラ氏は電話をくれて，「昨日は言葉が足りなかったと思っている。自分の部族の集会に出てほしい」といった。前日の彼はマオリ人であり，翌日の彼は現代社会の外交官であった[11]。彼の外交官の部分を利用するのはためらわれて，惜しいが出席を遠慮した。のちにマオリ人気質に，強烈な民族意識とすぐれた外交官意識が同居しているのを学び，自分の判断が間違っていたことを知ったが。また，こんな体験もある。あるマオリ人の語り手から，「話を一つだけ語ってあげよう」といわれ，マオリ語で語られるその話を喜んでメモし後で英語に訳してみたところ，イソップの童話「アリとキリギリス」だった[12]。とぼけた風貌の語り手だったが，その「場」で双方の顔をつぶさないようにし，かつ，後にマオリ人としての真意を知らせる効果のある，巧妙な追い払い術を使ったのである。彼もまた民間外交官だった。このように，マオリ人の世界を探ろうとすると，マオリ人は必ず，こちらの決意，理解度，目的がどのレベルにあるのかを探りかえしてきた。しかしマオリ人はけっして閉鎖的ではない。こちらが対等に探り合うことの意味を悟ったときには，必ずハエレマイ（ようこそ）の言葉がかけられる。

やがて北島東海岸の名門部族出身の語り手ワイレム・パーカーを知った[13]。しかし彼も最初はそっけなかった。一旦帰国した筆者が再度ニュージーランドへ渡る前に出した手紙には，ついに返事がこなかった。けれど彼の部屋を訪ねたとき，それは不意の訪問だったが，筆者の手紙が棚の上に乗っていたのである。ワイレムは，友人を紹介し，次に家に招いて家族を紹介し，というように，手順を踏んで筆者を「内輪」に入れた。ある日，彼の「身内の一人」として，集会に出席を許された。そこで初めて，本物の語りを聞いたのである。創世神話の語りは魅力的であり，集会所の中では昔話もたくさん聞くことができ，当初の目的はかなえられた。

しかし昔語り以上に印象的，かつ衝撃的だったのは，長時間にわたる挨拶

の儀式を知ったことだった。二つの異なった地域の出身者が，東西に分かれて向き合い挨拶を交わすのだが，いわば玄関口の挨拶に3時間以上かける。昼すぎに始まり，西日が傾いてきたのに，急ごうとする様子もない。小声で隣の人に聞くと，「挨拶が済まなければ集会は始まらない，明日には終わるかもしれない」とのことだった。このとき初めて，マオリの挨拶の儀式は，遠方から訪れた未知の人々との出会いを想定して確立されたのかもしれないと思うようになったのである。

相手の氏素性や気ごころが定かでない場合，互いに自己紹介し，時間をかけて理解しようとするのは当然である。何夜もともに過ごす（客を泊める）間柄になるには，危険や疑いを排除するだけでなく，共感体験をもたなければならない。

未知との遭遇に備えた儀式が，何時，どのような体験を経て確立されたかは分からない。マオリを含むポリネシア人の起源が同定されていないからである。ポリネシア人は，紀元前4，5世紀に，ジャワのあたりを通過し，やがて南太平洋諸島にたどりついたという説もある。ポリネシア全域に伝わる伝説によれば，共通の故郷は「ハワイキ」と呼ばれる。ハワイ Hawai'i という地名は，ハワイキ Hawaiki から子音 k が抜けた名であるが，ハワイ諸島をポリネシア人の発祥の地とする根拠はない。筆者の会った語り手の一人は，ポリネシア人は，北欧のバイキングよりはるかに勇敢な海洋民族だったといった。「（本で読む限り）バイキングはちょこちょこと海へ出ては，岸へ戻っているではないか。ポリネシア人はカヌーを外洋に漕ぎ出したら，長い間陸を見ることはなかった」のに，というわけである。別の語り手は，ポリネシア人の故郷ハワイキは，もともと南太平洋のフレンドリー諸島にあり，そこから，北へ（ハワイなど），東へ（イースター島など），南へ（ニュージーランドなど）大航海が行われたという。いずれにしても，これだけ広い距離を航海しているうちに，多くの異民族，異文化との出会いがあったのは確かだと思われる。その点，約5万年前から豪大陸に暮らしていたアボリジナルと，

大陸の住民よりさらに隔絶されていたであろうタスマニア島人とは対照的な歴史をもっている。

異民族との遭遇を前提とした儀式が，マオリ民族の生存を確かにした条件の一つであったという予感はある。しかし予感を確信に導くためには，少なくとも次の4点を見ていかなければならない。

1. マオリ人の伝統的な儀式，特に異民族，異文化との出会いの際の儀式
2. キャプテン・クックの記録を含めた初期の渡来者，150年間の入植者たちの解釈と反応
3. ワイタンギ条約締結後のロンドン政府への，植民地政府からの報告
4. 独立後のニュージーランド政府の諸政策

1.は筆者自身の体験や聞き書ノートとテープをおもな資料として使う。筆者はフィールドワークの訓練を受けていないので，あくまでアマチュアの記録であることをお断わりしておく。2.については，渡来者，入植者の日記など個人的な記録や軍隊の指揮者の報告書がある。3.は，公文書にマオリの伝統への言及があるかどうか。4.は，政策立案段階における先住民伝統の位置づけを見ることで明らかになるだろう。(2.3.4.および結論は，2号以下に続いて発表したい。)

次章では，1.の内容に先だって，儀式とそれを行う場について説明したい。

3. 「フイ」と「マラエ」

集会あるいは祭りを意味するマオリの言葉は，「フイ」である。多くのフイは，二つのグループ，つまり客人側と主人側の参加によって成立する。「マラエ」は，各地の部族の領土の中心地，ほとんどの祭儀が行われる野外の場所を意味する。ただし一定の囲い地である。現在のニュージーランドでは，マラエという言葉はひんぱんに聞くが，フイは滅多に耳にしない。現在のパケ

ハ（白人住民）は，マオリ学生の数を増やすために，大学キャンパスに，「マラエを建てよう」という。あるいは，「昨日マラエに参加した」という使い方をする。しかし，この用法は正確ではない。それぞれ，「ファーレを建てよう」「フイに参加した」が正しい。ファーレは，各部族の先祖神の体内に部族民が入るような形に作られ，部族の英雄たちの彫刻を施した柱が並ぶ集会所のことである。[14)]

マラエはもともと「寛容な」，「もてなしの厚い」という意味をもつ。客を歓んで迎える場所，つまり玄関口に重点がおかれる言葉である。フイの中で最も重要なのは，集会所に入る前のこの出会い，あるいは挨拶の儀式である。これを「ミヒ」という。ミヒの段階で客人のグループと主人のグループの友好関係確認が失敗すれば，そもそも集会所に入るまでに至らない。つまりマオリの社交の重要場面は，集会所の前面にある野外の地において展開されるのである。昔カヌーに乗った二つのグループが海上で出会ったときは，二隻のカヌーの間の海面もマラエとみなされた。

パーカー氏に同行して筆者が出席したフイは，首都ウェリントンの近くにあるロワーハット市の美術館をファーレに見立て，その前面の広場をマラエとして行われた。主人側はオタキ地方の部族他，複数部族，客人側はパリハカ地方の部族である。ともに名門部族であるが，筆者は主人側の部族の一員としてパリハカの部族を出迎えることになった。主人グループは，建物を背にしてすわり，客人グループは向かい合った位置につく。昔マオリ部族のほとんどは，肥沃な海岸地帯に定住していた。客人の交通手段はカヌーが多かった。従って，マラエにおける客人は，海を背にしていたことになる。[15)] 筆者の出席したフイは内陸で行われたから，客人グループはバスでやってきた。客人側，主人側とも旧知の仲であり，儀式が始まる前は，ごく親しげにみな談笑していた。けれども一旦儀式が始まると，まったく未知の者同士のようにふるまい，正式な出会いの儀式が，省略なしに，厳粛かつ真剣に行われた。誰もが，今日のフイは非友好的な雰囲気になるわけがないと知っているにも

拘らず，である。

次に，フイの初めにある出会いの儀式＝ミヒの手順と内容，を記したい。

4．出会いの儀式＝ミヒの手順と内容

ミヒの手順は次の通りである。[16)]

1　ワエレア　——客人側の男性リーダーによる魔除けの呪文。

2　タキ　——主人側の若い男性グループによる脅しのための戦闘の歌，所作つき。

3　ポーフィリ　——主人側の女性グループによる歓迎の歌，踊りつき。

4　カランガ　——主人側の女性による歓迎の呼び声。

5　タンギ　——客人，主人双方による死者を悼む嘆きの歌，踊りつき。

6　ファイコーレロ——演説，初めに主人側，それから客人側。

7　ワイアタ　——哀悼歌，6の合間に歌われる。

8　ホンギ　——鼻と鼻をこすり合わせるキス。

9　入場

各内容は次の通りである。

1　ワエレア

ワエレとは，木を切り倒したりして道を拓くという意味である。敵地あるいは味方の土地であっても，他人の土地に入るわけだから，その地に充満する「気」に呑み込まれないように，呪文をとなえる。「悪霊から身を守らせたまえ」という意味の祈りである。客人の男性の中で指導的立場にある年長者が行う。呪文が唱えられている間に，客人グループが，ファーレ（集会所）を背に待ちかまえている主人側グループの正面に揃う。

2　タキ

挑戦（脅し）と戦闘前の元気づけの歌と踊りである。ワエレア抜きで，いきなりタキが始まる場合もある。むしろワエレアとタキが両方とも行われるのは，旧知の仲のグループが再会する儀礼的な交換の場が多い。昔，全く未知の集団と遭遇した際のミヒは，ほとんどタキ（挑戦）で始まった。タキには先制攻撃の効果がある。タキの花形である「ハカ」は，ロトルア市で観光ショーとしても披露され有名であるが，これは男性グループによる出陣の歌と踊りである[17]。槍や棍棒を手に，足を踏みならし，白目をむいて，最後に舌を突き出す。相手を軽蔑し脅す意味の仕草である。時には，客人，主人双方から，次々と若い者たちが出て，相手を挑発し，追いかけ，追われる踊りを繰り返す。子供の鬼ごっこのように，「陣地」に逃げ込んだ者を深追いしてはいけない。追っ手は，相手陣地の前で踏みとどまらなければならない。戦闘「ごっこ」である。但し，非友好的な出会いだと両者が察知した場合は，早くもこの時点で本気の戦いが始まる。初めてハカを目のあたりにした初期の入植者たちは，本当に襲われるのかと思ったという。ところが，ハカの最中に相手側の女性が，ハエレマイ！（ようこそ）と歌っているのを聞いて，これは「戦うふり」にすぎないのだなと気付いたという。次回のテーマに入り込んでしまったが，タキ（ハカ）の真に迫っている様の記録は少なくない。

再度行きすぎて書くが，好戦的な民族といわれるマオリ人の名誉のためにつけ加えれば，マオリ戦士は，ハカを省略して戦闘を開始することはなかった。マオリ土地戦争（1860-72）時代の英軍兵士の記録に，マオリを殺すのはとても簡単だった。なにしろ，目の前に並んで歌ったり踊ったりするからだ，とある。日本の侍が，名を名乗って戦うのと同じ武士道的心得かもしれない。

「ハカの一例」

Ka mate, ka mate!	死だ，死だ！
Ka ora, ka ora!	生だ，生だ！
Tēnei te tangata pūhuruhuru	毛むくじゃらの男だぞ
Nāna i tiki mai whakawhiti te rā!	太陽が昇るようにした男だ

Hūpane, kaupane, hūpane, kaupane　こっちの足で一歩，別の足で一歩

Whiti te rā!　太陽が昇る！

戦闘の歌にしては謎めいている歌詞だが，故事にもとづいている。昔，ナティ・トア部族の勇猛な首長テ・ラウパラハが，タウポ湖で敵の手中に陥った。そのとき，「毛むくじゃらの男」がテ・ラウパラハ首長をかくまい，逃亡用のはしごをくれた。首長は，はしごを一歩一歩登って，隠れ潜んでいた所から明るい所へと逃げだし，のちにこの歌を作ったのである。[18]

ハカの歌と踊りのステップを，戦士たちは正しく覚え，歌い，踊るように訓練された。出陣前に歌詞や振りを間違えると，戦闘において死ぬと信じられていたからである。

ハカは，第一，二次大戦の時にマオリ兵士のみならず，パケハの兵士の間にも盛んになった。恐怖心を抑える効果があるという。新しいハカの歌も作られた。悪役は，イタリーとドイツと日本である。

「大戦中のハカの一例」

Kia kūtia! Au! au! Whiti! whiti! e!

団結しよう，おうおう，戦え，えい！

Ka pāhi Itari! Ka poharu Tiamani! Ka miere Tiapani!

イタリーは終わった！　ドイツは沈んだ！　日本は消えた！[19]

第一，二次大戦は，パケハとマオリに，同じざんごうの中でかばい合う体験をさせた。戦争は思いがけない副産物をもたらすことがある。豪州人やニュージーランド人にとって，戦争は，しっくりいってなかった複数民族を，運命共同体という意識で結び合わせたのである。

3　ポーフィリ

ポーフィリは女性がリードする。大きい声で立派に歌えば，周りの人々が唱和する。歌いぶりが貧弱であれば，唱和する人が少ない。そうなると，主人側の勢いの弱さ，つまり「マナ＝威光」の低さを露呈したのも同じである

から，客人側にあなどられる原因となる。

「ポーフィリの一例」

女性		全員のコーラス	
Kūmea mai	こげや	te waka!	カヌー!
Tōia mai!	ひけや	te waka!	カヌー!
Ki te urunnga!	枕もとまで!	te waka!	カヌー!
Ki te moenga!	休む場所まで!	te waka!	カヌー!

Ki te takotoranga i takoto ai, te waka e!

横になって寝る場所まで，カヌーを!

歌の最後に，女性は緑の葉のついた小枝を頭上高くあげて振る。歌は，カヌー（客人の乗り物）をひっぱって，岸（我々の領土）に上げるのを許可しますという意味であり，歓迎を表す。

4　カランガ

主人側の年長の女性が，集会所の入口の向かって右の位置に，客人の方を向いて立ち歓迎の言葉を発する。客人側がそれに応じた言葉を交わす。これがカランガである。ポーフィリの後とは決っておらず，カランガは，ミヒ（出会いの挨拶）の間，何回か行われる。とくに重要なのは，ミヒが無事に終わって，両グループの間に友好関係が確認された後，ではどうぞ集会所にお入りなさい，という主人側の呼びかけである。呼びかけ人は手に緑の小枝をもつ。筆者の出席したフイでは，カランガは，オタキ地区首長の娘さんが引き受けた。最年長者ではなかったが，主人側の最も有力な女性としての地位をしめている人である。

「カランガの一例」

主人側女性

Haere mai rā i te reo o te rā, haere mai rā!

Haere mai rā e kui mā, e koro ma i te pō

E tama mā, i te karanga o tō tātou tipuna whare e tū mai nei

Huhuingia nai rā o tūtou mate Kia tangīhia i te rā nei

Haere mai rā!

今日の声よ　いらっしゃい　ようこそ！

年とった女も年とった男も　地下の世界からおいでなさい

いらっしゃい　子供たちよ　ここに立つ先祖の家の呼びかけに応えて

わたしたちの死者を集めて　今日一緒に悼みましょう

ようこそ！

歌詞でわかるように，ポーフィリが目の前の客人に呼びかけているのに比べて，カランガはあの世の死者に呼びかけ，ついで列席者に，ともに死者を悼もうではないか，と呼びかける。

これに対して客人側も，（主人側の）先祖の家（＝集会所）に入れて頂く前に，昔から今日までに亡くなったみなさまに哀悼の意を表しますから，どうぞ呼んで下さい，と歌いかえす。このやりとりが繰り返されて死者の霊がしずまったところでカランガが終わる。

5　タンギ

タンギは，死者のために泣くという意味の言葉であるが，転じて，通夜とか葬式もさす。通夜と葬式には平均3日かかる。先に述べたように，マオリ人は勤務先から3日の忌引休暇を得られる場合が多い。昔は，葬儀の場で，おもに女が石で体を傷つけながら泣いた。筆者の出席したフイは，葬儀ではなく，もうはるか昔に亡くなったパリハカの首長テ・フィーチを讃える儀式であった。テ・フィーチは，パリハカ地区で激戦となったマオリ土地戦争のとき，暴力による反抗をいましめ非暴力をとなえた。今でもパリハカのガンジーと慕われている。百年以上も前に死んだ先祖を悼むのと，昨夜死んだ者の葬儀では，泣き方が異なる。本当の葬儀では，頭をたれて泣く。テ・フィーチを忍ぶフイでは，黒い服を着た年長の複数の女性が，ハンカチをもった手を優雅にふるわせて踊った。マラエでは，カランガで呼びだされた先祖も列席者の一員である。マオリ人にとって，死者は二度とふたたび帰らぬ人で

はない。礼を尽くして呼びだせば，すぐそばにきてくれるのである。(創世神話のトリックスター，マウイ，の母親などは，あの世とこの世を毎日すいすい行き来する。) 愛する者を失った悲しみは，むろんあるのだから「よよと泣く」が，マラエに列席してくれてうれしいから「泣いてもすぐ元気になる」のである。タンギの意味をよく知らない人（例えば初期の入植者たち）は，すばやく変わるこの泣き方（喜び方）に当惑したという。

タンギは，全く未知の者同士であっても，共感できる歴史のあることを思い出す機会を与えてくれる。共感できる歴史とは，人間は誰でも，先祖によって今生かされている事実である。子孫をもたない人間はいても，先祖をもたない人間はいない。未知，既知を問わず，人はみな等しく死者になった先祖という損失を抱えている。それをタンギは思い出させてくれるのである。

6　ファイコーレロ

ファイコーレロは，雄弁大会といってもよい。演者が立派な演説をすれば，彼のマナ＝尊厳，威光，がいやます。また，こんなに立派な演説家がわが部族にいるのだぞと誇ることができるという意味で，部族民一同のマナも向上する。演説は，個人と帰属集団の両方のマナを押し上げるのに貢献するのである。筆者が聞いたファイコーレロの内容は，創世神話，部族の系譜，過去の様々な出来事（ビクトリア女王の話もあった），むろんテ・フィーチへの賛歌，そしてマオリの若者への小言も含めた現在の状況などであった。ユーモア，当意即妙のエピソードを盛り込み，身ぶりをまじえた動きは大きく，なかなか迫力があった。演説家は，それぞれのグループの指導的な立場にある年長の男性であり，若者たちは将来に備えて必死で演説に耳を傾ける。ファイコーレロは，もともと無文字文化時代の伝統である。若者は，どんな演説もそらで記憶しておかなければならない。

マオリ人は，「他者の話をよく聞き，よく覚える」という点で，文字民族をはるかにしのぐというのが，筆者の印象である。マオリ人作家ロラ・パキティティは，子供時代に雄弁大会を傍聴し（子供は重要なマラエには入れな

い)，自分の部族の代表者の演説がうまくいくと誇らしく思ったと書いている。[20] 話すことを競えば，言葉がみがかれる。冗漫な表現は退屈だ。汚い言葉は嫌われる。不適切なたとえは笑われる。これらは，自分と部族のマナをおとしめる。だからといって，美しい言葉をちりばめ耳に快い演説をすればよい，というわけではない。伝統的なマオリ社会には，書類がなかった。話がすべてであり，発言者の責任は大きかった。聞く側の利害をいえば，重要な発言は，集団で（多くの耳で）聞いておかねばならないのである。無文字社会では，「口約束」は名誉をかけて守らなければならない約束である。筆者の知っている雄弁家のマオリ人たちは，手紙に返事もくれないし，本にこう書いてあるといっても信用しないが，面とむかっていったことは必ず実行する人々である。

7　ワイアタ

哀悼歌は種類が多い。純粋に哀悼の意を表す歌，たった今為されたファイコーレロ（演説）を認知するよう，列席している（が，姿の見えない）先祖たちに頼む歌，あるいは重い演説の合間に聴衆を和ませる歌がある。筆者が聞いたワイアタの中には，メロディーが西洋音楽に近いものもあった。その点を，語り部の家系に育ったワイレムは次のように説明する。マオリが英国など欧州からの渡来者と接するようになった頃から，メロディーが変わってきた。初期の入植者に歌を聞かせたとき，マオリ人のほうは１オクターブも高低に変化のある歌を歌ったつもりだった。ところが，聞き手からは，単調きわまる歌，ほとんどお祈りみたいだという反応しかかえってこない。そこでこんどは，パケハの歌，西洋音楽を聞かせてもらった。そして，もともと音楽の天分に恵まれているマオリ人は，すぐにそれらのメロディーを取り入れた，というのが真相らしい。

変化したのは，歌だけではない。踊りの振りも変わった。ポリネシア地域の他の踊りとくらべると，マオリには大きく手足を動かし，派手な踊りが多い。振りの変化には，二つの要素が関わっている。一つは，ニュージーラン

ドの気候である。故郷ハワイキは（南太平洋諸島であれ，中央アジアであれ），ニュージーランドより暑い。ニュージーランドに渡来したマオリ人は，寒さに対抗するために，手足を大きく動かすようになった。若者が踊りを習うのは，寒い夜だったことも影響している。もう一つは，パケハとの出会いである。言葉が通じない時のコミュニケーションは，おもに動作である。マオリ人は，パケハとの意志の疎通のために，誇張したわかり易い振りを考案したのである。

8　ホンギ　　9　入場

日も暮れようとするころ，ロワーハット市のミヒ（出会いの挨拶）は，やっと終わりに近づいた。そこへカランガ（集会所入口に立つ女性の呼び声）が響いた。主人側の一同は席を立ち（美術館前の広場は石だたみなので，みな椅子に掛けていた），集会所の前に一列に並んだ。客人たちがゆったりこちらへ移動してきた。一人一人と鼻をすり合わせてキスをする。これがホンギである。ホンギを済ませた客は，ゆっくりと集会所（客から見れば，他部族の先祖の体内）に入っていくのである。客人がみな集会所に入った頃，主人側の面々の鼻は真っ赤，ひりひり痛い。でもまだ，ミヒが終わったにすぎないのだ。ミヒは，フイ（集会）の時間配分から見れば開会の辞ぐらいでしかない。フイ全体が終わるのは，明日か，明後日か，誰にも，しかとは分からない。

これだけ時間とエネルギーをかけて，やっと心から打ち解けられる仲になった客人たちと，なぜあわてて別れようとする？　と，マオリ人はいう。知らなかった同士が胸襟を開き，友情を結ぶなんて，いつでもできることではない。祝う価値がある。今日や明日の仕事を思いわずらうのはやめよう。手にとって目で見て確かめられないものを，かち取ったばかりなのだから。未知だった人間の信頼をかち取ったのだ。人生の貴重な時間は，この偉大な勝利を大いに楽しむためにこそ使うべきだ。もし，出会いの儀式で，互いに敵意を察知したとしたら，多くの列席者の人生は，今日で終わっていたかもし

れないのだから。しかも，この勝利には，敗者がいない。また，代償を払って得た勝利でもない。勝利を導いた武器は，声や歌や踊り，それになによりも言葉だ。言葉は，警戒心，緊張感，疑い，迷いを退け，信頼，安心感，確信，希望をもたらした。そんな思いを抱きながら，みな集会所に入場する。

5. 儀式の効用

1　ワエレア　——客人側が，他人の土地（縄張り）に入る際の心理的重圧感をとりのぞく。

2　タキ　——主人側が，客人側（未知の来訪者）にあなどられるものか，いざとなったら武力行使も辞さないぞと，決意を明らかにする。

3　ポーフィリ　——しかし一方で，旅は長く疲れたでしょうとねぎらい，早くおあがり下さいと客人を促す。

4　カランガ　——そしてさらに，我々は未知の来訪者を受容する度量の持ち主ですよ，ここにある先祖の建物に泊めてあげますよ，と歓迎の心構えと実際の準備（食物など）のあることを表明する。

5　タンギ　——みな等しく抱いている喪失，先祖の死，への悲しみを通じて，共通するもののあることを確認する。

6　ファイコーレロ——優劣の目立つ2グループが，対等の関係を築くのは難しい。我々は，すぐれた人物を多く輩出するすぐれたグループである。相手も，すぐれた人物を擁するグループであってほしい。ファイコーレロは，語りを聞くだけでなく，言葉に関わる対等の関係を成立させるチャンスとなる。

7　ワイアタ　　——哀悼歌であるが，前述したように様々の種類があり，入学式や卒業式の式辞の間に歌が入るのと同じく，気分転換になる。むろん，音の楽しみという娯楽的効用もある。

8　ホンギ　　——これはお辞儀や抱擁と同じ挨拶である。礼節が様式化されていることを他民族に示すことができる。

6．「はじめにことばありき」

手元にマオリ語のバイブルがある。1840年に発行されたものである。[21] マオリ文化は文字をもたないが，英語のアルファベットを借用するようになった。パケハ（白人住民）とひんぱんに接触する機会のあったマオリ人は，かなり早い速度で文字を学び，英語に堪能になった。マオリ人の中で一番先に洗礼を受けたのは，ホキアンガ地区のナプヒ部族の大首長タマティ・ワカ・ネネ（1780？-1871　トーマス・ウォーカー・ネネ）である。彼はサー・ジョージ・グレイ総督がナイトの称号を得たとき，従者の一人に選ばれ，ビクトリア女王から銀のゴブレットを贈られている。彼はワイタンギ条約に署名した首長の一人であり，一貫してパケハ（白人）への理解を示した。彼の盛装の姿を描いたジョージ・フレンチ・アンガス（英国の画家，1844にニュージーランドを訪問）によれば，ネネ大首長ほど，「高貴な品性の体現者」はいないという。[22]

アンガスの感想が「高貴なる野蛮人」の思い込みに基づいていないかどうかは，次の検証の際の宿題となるが，伝説化されたエピソードの多いところから察するに，ネネ大首長は「すぐれた人物」の一人といえるようである。出会いの儀式の中であげたファイコーレロは，すぐれた人物が部族にいることを証明する手だてであった。ではすぐれた人物とは何か。それは，よく話

し，よく聞き，よく記憶する者である。少なくともマオリ人にとっては，そうである。一言でいえば「はじめにことばありき」の信条である。テーマ，論理の質だけでなく，話す人の全人格が聞き手の前にさらけだされる。話は，恐ろしい文化活動である。

マオリ人が，北半球の異文化に遭遇したとき，出会いの儀式ミヒを行ったことはキャプテン・クックほか，19世紀以降の記録にもある。「マラエ」が，現在のパケハにとって，親しみのある言葉として浸透しているのは，実際にマラエに出席したパケハの人数の多さを示している。しかし，マオリ人の先祖の体内（ファーレ＝集会所）に入った記録はあまりない。幾たびも思い起こさなければならないのは，出会いの儀式の最も重要な部分は，マラエ，客人（例えば入植者）からいえば主人（例えば先住民）の神聖な先祖の体の前面にある空間で執り行われるという点である。集会所は，伝統的で美しく，ユニークな建物である。このような「手ごたえのあるもの」に深淵な意味づけをするのは易しい。しかし150年を経た現在，フイの大方のプログラムが進行する集会所より，出会いの儀式が行われるマラエのほうが，マオリタンガを象徴する言葉として根付いているのは述べた通りである。それほどマラエの儀式は重く，印象深いという証だろう。そして全く異なった伝統を背負って列席した150年前の「客人」も，砂浜や海上やただの地面にすぎないマラエが，マオリの神殿，マオリの教会であると理解する資質の持ち主だった証だろう。そこで，150年前の出会いは，先にあげた意味の「すぐれた人物」集団の出会いであったといっては急ぎすぎだろうか。

マラエでの様式化された儀式は，祈り，挑戦，歓迎，哀悼，論争，主張，共感，そして敵意も愛情も，なんであれ表現するのに「言葉は有効である」と示したはずである。マオリの伝統と聖書の教えは相違点が多すぎるし，右手に聖書左手に銃の文化を，ネネと違って受容しないほうを選択したマオリ人は当然多数派であったが，それでも「はじめにことばありき」の本質は理解しただろう。この本質は，強度や長短の違いはあるものの，二民族，二文

化の「両岸」から強力な絆を形成し伸ばすのに貢献した。しかし，こう推測し，「マオリの伝統が被征服民族生存の条件として機能した」と結論する前に，先にあげた残り3点の検証を行わなければならない。

註

1) 欧州人との接触は17世紀半ばのアベル・タズマンの例もあり，かなり早くから始まった。捕鯨，木材業者も立ち寄っていた。豪州からの一旗組も多く，入植は150年前より早い時期から行われていた。「建国か入植か」という表現についてだが，「1990年は近代国家ニュージーランド'建国'150年の年」が一般的かもしれない。しかし，1988年に隣国の豪州が「建国200年」を祝ったとき，原住民アボリジナルは「被征服民族にされて2百年」を祝うことはできないと反発，祝賀行事をボイコットする動きも活発だった。ニュージーランドはこの兄貴分の体験を踏まえ，「祝賀」には積極的でない。ニュージーランド政府は，1990年を，150年間の問題を検討，整理する節目の時期ととらえている。多くの意味で入植が全国規模で機能し始めたのがワイタンギ条約後，という見地から，小文では「入植」を使用する。「マオリ」という呼び方は欧州から渡来した白人との出会い後から使われた。先住民たちは，白い帆の船にのってきた者たちと出会ったとき，自分たちをさして「マオリ（この土地の）」と叫び，白人たちをさして「パケハ（よその土地の）」と叫んだ。以来およそ千年前にニュージーランドへ渡来した東ポリネシア系先住民は「マオリ」，欧州系白人は「パケハ」の名称が定着している。民族的には同じであっても，この150年間に移住してきたポリネシア系住民（サモア，トンガ，ニウエ，ラロトンガ島人）は，マオリと呼ばれない。現在のニュージーランドでは，マオリ人とアイランダーの間には，明白な階層意識が存在する。

2) 「アオテアロア」はクペ伝説（初期の航海者の妻が，遠くに白雲がたなびいているようなニュージーランドの島を発見して，長い白い雲と叫んだ）に由来する名前である。

3) *New Zealand Official Yearbook : 1988. 1989,* Department of Statistics, Wellington, p.138.

4) キース・シンクレア著『ニュージーランド史——南海の英国から太平洋国家

へ』（青木公，百々佑利子訳）評論社，1989年，25頁。

5) マニング・クラーク著『オーストラリアの歴史——距離の暴虐を超えて』（竹下美保子訳）評論社，1978年，78頁。

6) タスマニア・ネグリート・アボリジナルが，1867年のトルガ（カ）ニニ死亡をもって滅びたとされる説は，最近否定された。フリンダーズ島出身のアボリジナルが，タスマニア島人であると主張したことによる。タスマニア島における「ブラック・ドライブ（アボリジナル追放作戦）」は1830年。アボリジナルは季節ごとの半遊動生活を営んでいたが，入植者が牧場として土地を囲ったために伝統的な暮しが破壊された。

7) クラーク『オーストラリアの歴史』83頁。

8) 百々佑利子著『キーウィと羊と南十字星——ニュージーランド紀行』あかね書房，1984年，38頁にこのエピソードを収録。

9) キャプテン・クック著『太平洋航海記』（荒正人訳）教養文庫，1980年，106頁。このエピソードは，筆者の聞き書の中にあるが，キャプテン・クックは，ニュージーランドの「インディアン」が釘を珍重する様を何度か記している。

10) ニュージーランドの国会議員の定員は97名。うちマオリ議席は4。選挙民はマオリ人であることを自己申告できる。

11) Witi Ihimaera, 1944年生まれ。北島のテ・ファナウ・カイ部族の出身。ビクトリア大学卒。外交官，作家。作品 Pounam Pounam 1972, Tangi 1973, Whanau 1974, 邦訳「通夜」（百々佑利子訳）は『現代ニュージーランド短編小説集』に収録，評論社，1981年。

12) A. W. Reed, *Maori Fables*, A. H. & A. W. Reed, 1964, p.13 には，「アリとキリギリス」が収録されている。とすればこの追い払い術は，マオリ人が口頭伝承に関心をもって寄ってくる人々に用いる手段として広く普及しているのか。

13) ワイレム（ビル）・パーカーについては，『キーウィと羊と南十字星』29頁。パーカー氏は，1985年死去。

14) H. W. Williams, *A Dictionary of the Maori Language*, Seventh edition, A. R. Shearer, Government Printer, Wellington, 1975. 本文中のマオリ語の意味はこの辞書による。

15) 『キーウィと羊と南十字星』6-8章

石像が海に背を向けて建てられていることは，イースター島の謎の一つである。筆者はイースター島に行ったことがないので憶測にすぎないが，石像群は，

悪または富をもたらす客人＝未知の来訪者を表しているのではないだろうか。石像を建てて，永遠に子孫にその来訪を残そうとしたのは，とてつもない災難または（カーゴカルトのような）大きな幸いがもたらされたからではないか。

16) Anne Salmond, *HUI-A Study of Maori Ceremonial Gatherings*, A. H. Reed, Wellington, 1975, p.128. 著者は，タキ taki の代りにウェロ wero を入れ，ワイアタを独立させていない。筆者の承知するところでは，タキとウェロは，地域（部族）によって呼び名が異なるが，内容は変わらない。

17) もしハカが神聖なものならば，なぜ観光客に見せるのか，という疑問がある。現代のマオリ人によれば，マラエもしくはファーレという場が神聖なのであって，歌や踊りの一つ一つには拘らない。けれども，戦争でパケハ兵士とともにハカを歌い踊ったことがきっかけで，このような心境の変化が起こったのかもしれない。現在小学校では男子がハカ，女子がポイダンスを習っている。ポイダンスはマオリ・カヌーの娯楽であり，神聖な儀式とは関わりない。

18) A. Salmond, *HUI*, A. H. Reed, Wellington, p.143.

19) *Ibid.*, p.134.

20) ロラ・パキ＝ティティ作「古い網と新しい網」（田中明子訳），『現代ニュージーランド短編小説集』評論社，1981年，126頁。

21) *Ko Nga Upoko Ewitu, Poropiti A Raniera : Poropiti A Hona*, 1840.

22) Geoge French Angas : *The Angas Prints*, 1973, The Alexander Turnbull Library,1973.